

令和三年度 第四回例会

観世流

# 緑泉会

令和四年

二月六日(日)

午後二時開演

喜多六平太記念能楽堂



「老松」演 中野 宣夫 (撮影 茂田 裕之)



「東北」演 津村 徳次郎 (撮影 吉越スタジオ)



「日本」演 坂 真次郎 (撮影 吉越スタジオ)

半能 Hanonoh ..... 老松 Oimatsu ..... 墨 敬子

能 Nob ..... 東北 Touhoku ..... 鈴木 啓吾

狂言 Kyogen ..... 呼声 Yobisue ..... 山本 則俊

能 Nob ..... 鉢木 Hachinoki ..... 坂 真太郎

# 半能 老松

老松ノ精墨 敬子  
梅津何某 野口 能弘  
從者 野口 琢弘  
從者 則久 英志

大鼓 柿原 孝則 太鼓 金春 惣右衛門  
小鼓 大山 容子 笛 槻宅 聡

後見 中森健之介  
津村禮次郎

地謡 石井 寛人 桑田 貴志  
藤村 答 中森 貫太  
吉留 敬高 奥川 恒治

# 仕舞 屋上 葵

觀世 喜正  
津村禮次郎

地謡 石井 陽子 簡井 陽子  
新井 麻衣子 中森 陽子  
杉澤 陽子 河井 美紀

〔休憩十五分〕

# 能 東北

和泉式部 鈴木 啓吾

從僧 村瀬 提  
旅僧 福王 和幸  
從僧 矢野 昌平

大鼓 國川 純 藤田 貴寛  
小鼓 田邊 恭資  
門前ノ者 山本 則秀

後見 新井 麻衣子  
桑田 貴志

地謡 簡井 陽子 佐久間 二郎  
石井 寛人 中所 宜夫  
中森 健之介 永島 充

# 狂言 呼声

太郎冠者 山本 則俊

主 山本 則重  
次郎冠者 山本 則秀

〔休憩十五分〕

# 能 鉢木

常世ノ妻 河井 美紀

佐野常世 坂 真太郎

旅僧 館田 善博  
最明寺時頼 大日方 寛

大鼓 柿原 弘和 藤田 次郎  
小鼓 鶴澤 洋太郎

早打 若松 隆  
二階堂下人 山本 則重

後見 石井 寛人  
奥川 恒治

地謡 新井 麻衣子 中所 宜夫  
佐久間 二郎 觀世 喜正  
永島 充 中森 貫太

# 附祝言

〔終了予定 午後五時三十分〕

許可のない録音・撮影は一切禁止です。携帯電話は電源からお切り下さい。演能や他のお客様の迷惑となる行為はご遠慮願います。場内によっては遺棄物もごさいますのでご注意ください。

## 半能：老松（おいま）

北野天満の信者梅津某（ワキ）が夢夢に導かれて筑紫国太宰府の安楽寺にやってくる。神託を得て境内の老松の下で夜を過している。寅の刻に至って老松の精（シテ）が現れ、舞楽を奏して梅津某の行く末を言祝ぐ。

半能は老松の謂れを紹介する前段の長い件を省略し、後シテの老松の精が真ノ序之舞を神威清冽に舞うことに焦点を絞る演出となる。

## 仕舞：屋上（やしま）

屋上の古戦場を訪れた僧に、合戦の様子を語り聞かせた義経の幽霊。修羅道の戦いを見せるが、夜が明けると浦は静かな朝の情景となり、松を吹き抜ける風の音が響いている。

## 仕舞：葵上（あいのうえ）

生霊となり光源氏の正妻葵上に取り憑く六条御息所。恨みは募り、過去の思い出を辿れば、またさらに思いは強くなる。賀茂祭の破れ車をそのまま枕元に寄せて、葵上を攫ってゆこうとする。

## 能：東北（とうほく）

年が改まり東国から都へ上る僧（ワキ）がある。霞が関を越え武蔵野も遙か遠くに過ぎ、とうとう都に着く。目に止まった盛りの梅について東北院門前の者（アイ）に尋ねると、梅の名を和泉式部と教えられた。しばらく眺めていると、そこからともなく里の女（前シテ）が現れ、藤原彰子すなわち上東門院がここに暮らしていた頃、和泉式部が植えた「軒端の梅」がこれに他ならないのだと物語る。また傍らの方丈の庵は和泉式部の寝所、今も当時のままなのでと云うので、僧は都の雅に感じ入り無粋を恥じる。女は「この花に住んでいる自分だからこそ知っているのです。実は梅の主なのです。」と明かして姿を消す。

門前の者と和泉式部のことを尋ねて、女の事を話すと、式部の亡心に違いないと聞き、僧は夜通し法華経を誦する。

法華経が現世を火宅に譬える譬諭品に至ると、和泉式部（後シテ）が現われ、昔、御堂関白道長がこの門前を通りかわり譬諭品を高くかに唱えたのに対し、「門の外法の車の音聞けば我も火宅を出でにけるかな」と詠みかけた思い出を語る。さらに歌舞の菩薩として守護する東北院の風光の、四季を通して陰陽の摂理を満たす理を舞に舞い、また春の夜の舞を舞えば、闇に梅の香が立ち籠める。懐

## 旧の思いは募り、思わず溢れる涙を恥じて

方丈に入るかと見ると、僧の夢は覚める。

## 狂言：呼声（よびこゑ）

無断で出掛けた太郎冠者に腹を立てた主は、次郎冠者を伴って太郎冠者を訪ねる。居留守を使う太郎冠者だったが、その声でそれと知った主と次郎冠者は、呼掛けに様々工夫を凝らして、何とか太郎冠者をおびき出そうとする。

## 能：鉢木（はちのき）

一所不住の沙門と名乗る旅僧（前ワキ）が、雪の信濃を逃れて鎌倉へ上る途中、上野国佐野の郷でまた大雪に襲われ民家に宿を乞う。応対に出た妻（ツレ）が主の留守を告げるのでその帰りを待っていると、主（シテ）が身の境遇を嘆きながら帰ってくる。長く待たにも聞かず、見苦しさを理由に宿を断られて腹を立て、僧は先へ向かう。妻に意見されて思い直した主が後を追うと、僧は降り積る雪に難儀をしている。追い付いて我が家へ迎え入れるが、本当に貧しい宿りである。僧は粟飯を饗されて喜ぶが、主の悲嘆は深い。

僧に暖を取らせたいと、主は秘蔵の鉢木があることを思い出してこれを火に焼べる。梅と桜と松の三鉢にはそれぞれ思い入れがある。寒さの中、真先に咲く梅。花が遅いと何か具合が悪いのかと心配した桜。そして松には常にひとかたならぬ丹精を込めた。この薪火に僧は感激し、主の名字を尋ねる。佐野の源左衛門尉常世と名乗りを聞いて、名門と思いついた僧は鎌倉での訴訟を勧めるが、常世は名執権最明寺時頼の不在を嘆き、たとえこの悲惨な境遇でも鎌倉に「大事あれば必ず駆けつける気概を示す。僧は宿を辞すに当たり、鎌倉に自分を訪ねるよう言い残し、夫婦も共に名残を惜しんだ。

2022. 2.6 (日) PM1:00 (開場 12:00)

**喜多六平太記念能楽堂**

〒141-0021 品川区上大崎 4-6-9  
☎ 03-3491-8813

JR・東急目黒線、地下鉄三田線・南北線の目黒駅西口より徒歩7分  
香港園手前の道を左折し約400m直進、杉野学園体育館手前を左に入る。

※ 駐車場がございませんので、お車でのご来場はご遠慮下さい。



**入場料**

会員券 (年4回)	一般 20,000円	学生 10,000円
1回券 (当日券)	一般 6,000円	学生 3,000円

**申込先：各出演能楽師または緑泉会まで**

墨 敬子	TEL&FAX 045-544-6787
鈴木 啓吾	TEL&FAX 03-3269-7018
坂 真太郎	TEL 03-3873-5404
	FAX 03-3873-5635

令和4年度 第1回例会 5月7日(土)

能…………… 忠度 Tadanori	…………… 津村 禮次郎
能…………… 百萬 Hyakuman	…………… 河井 美紀